

日野川河川整備アドバイザー会議 第1回自然再生部会 議事録

開催日時：令和7年5月26日（月）

13時30分～15時30分

開催場所：日野川河川事務所（Web 併用）

1. 開会

2. 審議事項（日野川水系自然再生計画の策定に向けて）

1) 前回の会議意見、関係機関意見への対応方針について

（A委員） 前回の会議で、地域の関係者と意見交換しながら進めていただきたい、と発言したことに対して適切に対応いただいている。今後も地域の関係者と連携を深めて、自然再生事業が活性化することを期待する。

（B委員） 計画の策定後にも関係機関に説明を行うのか。

（事務局） 関係機関にも説明して、情報共有を行いながら進める方針である。

2) 自然再生計画（素案）について

（D委員） ミナミアカヒレタビラの生息環境の整備目標について、近年の出水により、ミナミアカヒレタビラの生息に適した環境が変化していることが懸念される。整理された物理条件等は、何年前の調査結果によるものなのか。毎年調査しているのか。

（事務局） 5年に1回程度定期的に測量を実施しており、大きな変化はみられていない。

（A委員） ミナミアカヒレタビラの個体群の分布域は狭く、自然災害や事故（例：有毒物質の流出）等で個体群が消失するリスクがある。現在の個体群を保全するためにできることはすべて実施したほうがよい。

（C委員） 正常流量について、図では調整中あるいは欠測と示されている年についても評価に含まれているようだが、どのようにデータを整理・集計されたのか。

（事務局） この図は河川整備計画（平成28年3月）からの引用である。データを確認する。

（C委員） 正常流量の記載について、正常流量を確保することが難しい状況であることと、将来的に流況の改善に向けた努力が求められることを追記すべきと思う。

（事務局） 正常流量の確保が難しいことは日野川の課題と認識している。上位計画である河川整備基本方針あるいは河川整備計画で記述している正常流量の現状を、自然再生事業の前提条件として追記する方針でよいか。

（C委員） その対応でよい。正常流量を示すグラフの表題についても、「流況の経年変

化」ではなく「渇水流量の経年変化」とするのが適切ではないか。

(事務局) この図は河川整備計画からの引用であることから、表題は河川整備計画と合わせたい。新たに図を作成して記載する場合は、そういった制約は生じない。

(B委員) 整備目標について、面積や箇所数で示されているが、これらが定量的な目標という認識でよいか。生物をどれだけ増やすことを目標としないのか。

(事務局) 生息環境を整備することから、面積や箇所数を整備目標としている。

(B委員) 横断的な連続性の整備目標について、樋門・樋管等は32箇所もあるのに、検討フローに基づき選定すると1箇所しか残らないのが気になる。落差がなくても生息環境を整備したほうがよい箇所もあるのではないか。

(事務局) 流域として連続性を捉えて、横断的な連続性と縦断的な連続性をまとめて面的な連続性という観点で整備目標を整理することも考えられる。ただし、堤内地の水路は国交省の管轄外であり整備対象にできないため、河川が抱える課題として樋門・樋管の落差までを扱うこととしている。

(B委員) 一気に整備するのではなく、段階的に整備を進めていく必要があると思うが、整備のスピード感や順序を自然再生計画に記載しないのか。

(事務局) 費用対効果やタイミングを見つつ整備を進めたいと考えている。

(A委員) 侵略的外来生物魚の確認状況について、令和6年度の調査で初めてブルーギルとオオクチバスが確認された。ブルーギルは幼魚1個体だけだったが、オオクチバスは様々なサイズの個体を確認されたことから繁殖している。ワンドでの確認であり、出水したときに分布が拡大する懸念があるが、ワンドを干し上げることはできないので、調査を継続するしかない状況である。河道掘削や魚道整備にあたってはオオクチバスの分布を広げないことも考慮していただきたい。

(事務局) 参考とさせていただく。

(A委員) モニタリング計画にミナミアカヒレタビラの環境DNA調査が位置づけられており、今後、重要なデータになると思う。個体を傷つけるリスクがなく、ミナミアカヒレタビラ以外の魚類のデータも得られる。調査をすれば他の場所でもミナミアカヒレタビラが見つかる可能性もある。

(事務局) 委員に意見を伺いながら、採捕との併用や採捕の代替を検討していきたい。

(G委員) 採捕による生物の個体数確認もモニタリング項目に入れているか。

- (事務局) モニタリング項目に入れている。
- (G委員) 物理環境と生物の生息状況、両方のデータをとることが重要であり、整備するのは物理環境が中心だが、生物を保全するために整備することから生物の生息状況も把握すべきである。
- (事務局) 生物の個体数は、整備だけではなく、気象や水質など様々な環境要素の影響を受ける。モニタリングにより、整備した環境が生物にとって良かったのか悪かったのか評価して、次のステップに進める必要があると思うので、モニタリングの重要性を踏まえて計画していく。
- (G委員) 物理環境と生物の生息状況は、整備に対して応答する時間スケールが異なる可能性があるので、留意していただきたい。
- (E委員) 環境 DNA 調査は、水の流れが複雑な海域より、流れが一方向の河川のほうが生物の分布を把握するのに有効と聞いており、モニタリング項目としていただきたい。
- (G委員) 自然を相手にした検討は中々難しいが、試行的に整備して、自然の反応を見ながら次の整備を検討・実施していく形で進めるのがよいと思う。

3. 閉会

以上